

### 1 自己評価及び外部評価結果

#### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2191300991		
法人名	株式会社 You More Smile		
事業所名	グループホームほのぼの		
所在地	岐阜県加茂郡東白川村越原16-1-1		
自己評価作成日	令和6年1月22日	評価結果市町村受理日	令和6年2月28日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/21/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=2191300991-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search">https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/21/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=2191300991-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search</a>
----------	---

#### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 中部評価センター		
所在地	岐阜県関市市平賀大知洞566-1		
訪問調査日	令和6年2月15日		

#### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・利用者個々のニーズを引き出し、それに応えられるようなケアの向上に努めている  
 ・家庭的な雰囲気づくりを大切に、利用者個々の能力や特技・趣味を活かして生活している  
 ・ホームにいても地域に根差した暮らしが続けられるように住民との関わりや情報が得られるようにしている  
 ・季節や旬に合わせた料理を利用者参加で作成し、ともに楽しんでいる  
 ・季節や行事に合わせた飾りつけや会を開催し利用者の誕生会も行なうなど、メリハリのある生活を提供している  
 ・職員はそれぞれの個性や特技を業務に活かしている  
 ・単体のホームで本社とは80km離れており、現場の職員が非常時にも円滑な業務ができるように日々心構えをしている

#### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

数年前に運営法人が変わったが、理念の「互いに支え合い、家庭的な雰囲気」(要約)は、脈々と受け継がれている。利用者も職員もこの地域の出身者が多く、昔からの顔見知りや馴染みの関係もあって、大きな家族集団のような雰囲気である。職員が自宅から旬の野菜や果物を持参し、地域からも同様に頂き物がある。  
 小さな行政単位であり、村全体が家族のようでもある。村の広報誌「ひがししらかわ」は、毎月村役場の職員が届けてくれる。地域包括支援センターからは利用希望者の紹介があり、ホームの情報を地域に宣伝してくれる。  
 ゆっくりと流れる時の中で、利用者が穏やかな生活を送っている。

### V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
43	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:15) ○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	50	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:8,9) ○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
44	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:14,27) ○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	51	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2) ○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度ある 3. たまに 4. ほとんどない
45	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:27) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	52	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:3) ○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
46	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:25,26) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	53	職員は、生き活きと働いている (参考項目:10,11) ○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
47	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:36) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	54	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
48	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:20) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	55	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどいない
49	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:18) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	以前から続く「お互いに支え合いながら楽しく生活する」「家庭的な雰囲気ですら生活する」の運営理念を掲げ、職員はそれを理解し実践に努めている。	山あいにて、民家を改造したホームが立っている。利用者だけでなく、職員もこの地域の出身者である。数年前に運営法人が変わったが、理念の「互いに支え合い、家庭的な雰囲気」(要約)は、脈々と受け継がれている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域との付き合いは現在も積極的には行っていないが、昨春は4年ぶりに外食し昨秋は文化展を観に行った。	コロナ感染症が5類に移行したが、昨年9月に利用者全員が感染(職員は8名中6名が感染)するという緊急事態を経験し、コロナへの警戒感を緩めていない。今年度は、文化展への出品だけでなく、見学に出かけることができた。	
3	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議は2ヵ月毎に行なっている。ホームでの開催に戻している。ホームの状況や外部評価の改善点の進捗状況の報告、他機関からの情報提供や意見交換を行っている。	2ヶ月おきの運営推進会議は、通常の対面形式で開催されている。地域に住む家族が少ないために参加はなく、村役場の担当者、地域包括支援センター職員、民生委員等が集まり、ホームから状況報告を受けて意見交換を行っている。	「目標達成計画の進捗評価を行う」ことを、前年度の目標達成計画に掲げて実施している。しかし、議事録に記載がない。実施した証として、記録に残すことが望ましい。
4	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	2ヵ月毎の運営推進会議には役場担当者と包括支援センターの担当者が必ず出席し日頃も連携できる距離感を保っている。	毎月発行される村の広報誌「ひがししらかわ」は、村役場の職員がホームに届けに来る。地域包括支援センターからは利用希望者の紹介があり、ホームの情報の発信役ともなっている。	
5	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	月1回の職員ミーティングで「身体拘束適正委員会」の時間を設け、検討事例があれば協議している。	毎月の職員ミーティングには、非番の職員も含め職員全員の参加があり、その中で身体拘束適正委員会を行っている。施錠しないことを基本としているが、職員目の届かない出入口は施錠している。	
6	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待報道の報道資料などを通して職員の理解と防止に努めている。	介護分野に限らず、保育園や障害者施設での不適切な支援が報道される度に、自らのホームに置き換えて事例検討を行っている。職員同士の日常の会話の中でも、話題とすることで権利意識を高めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護制度に関する事例はないが今後 に備え知識の共有を図っている。		
8		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約、解約、改定の際は、利用者や家族に 理解し納得していただけるよう丁寧に説明を している。		
9	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者は日常生活の中で、家族は面会や 電話の中で気軽に意見や要望を出していた だけのような関係づくりに努めている	遠方の家族が多く、面会は多くはない。しか し、医療機関への定期受診にはすべて家族 が付き添っており、その際に家族から意見や 要望を聞き取っている。利用者アンケートに は、感謝の意を伝える文面で溢れている。	
10	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や 提案を聞く機会を設け、反映させている	月一回のミーティングには職員が全員出席 し、運営に関しての意見や要望を聞く機会を 作っている。	村役場や社会福祉協議会での勤務経験を持 つ職員が多く、職員は福祉に関する理解が 深い。毎月の職員ミーティングには、法人本 部から幹部職員が参加し、職員の声を拾っ ている。	
11	(9)	○就業環境の整備 代表者は、管理者及び職員個々の努力や実績、 勤務状況を把握するとともに、職員が向上心 を持って働けるよう、ワーク・ライフ・バランスに配慮 した職場環境や就業条件の整備に努めている	処遇改善や人事評価に関する基準や仕組 みを整備し運用している。	家業がトマト農家の職員がおり、家業の勤務 時間を考慮して、ホームでは週2日の遅番勤 務としている。「年収の壁」があって、管理 者以外はすべて非正規職員（パート）である。	
12	(10)	○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの 実際と力量を把握し、法人内外の研修を受け る機会の確保や、働きながらトレーニングし ていくことを進めている	外部研修参加は現在もほぼなし。ミーテ ィングの時間などを使って内部研修を行うこ とがある。	コロナ期間中、またそれ以降についても、 外部研修がリモートで行われることが多い。 しかし、ホームがWebの環境にないことか ら、研修参加は不可能な状態である。法人 本部から幹部職員がパソコンを持参し、研 修を行ったことがある。	職員の年齢層が高いこともあるが、そ れを言い訳とせず、パソコン操作の習 熟を図り、ICT化を進めることが望ま れる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会づくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	交流は休止している。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
14		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	「一つ屋根の下」で暮らす者同士だが、「親しき仲にも礼儀あり」の対応を常に意識している。		
<b>III. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
15	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	積極的に自分の思いや意見を言葉にする方が少ないので、日常生活の様子や会話から汲み取ることに努めている。	言葉による意思の疎通が可能な利用者が多いが、遠慮がちな地域性もあって、自ら意見や要望等を主張する利用者は少ない。職員は、選択肢を複数用意し、利用者を選んでもらっている。	
16	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月一回のミーティングで職員全員で利用者の介護計画の見直しを行なっている。訪問看護師も参加している。家族には面会時や電話で意見を伺っている。	入居後約1ヶ月間は暫定プランを立て、経過観察後に短期3ヶ月、長期6ヶ月の目標を設定した介護計画を作成している。暫定プランの第3表「日課表」は空白であるが、1ヶ月後には実施項目がびっしりと書き込まれている。	2名の利用者が「ビールを飲みたい」との意向を持っており、介護計画の実施内容に「ビールでの晩酌」を取り上げている。第1表の「利用者の意向」欄にも、「ビールを飲みたい」との記述が欲しい。
17	(13)	○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の介護記録ファイル、業務日誌、申し送りノート等を使い情報を共有し実践や介護計画に活かしている。	利用者個々に「介護記録」のファイルがあり、現行の介護計画が綴られている。ホームの活動を記述する「業務日報」には「申し送り」欄があり、早番、中番、遅番、夜勤者それぞれが、勤務時間内のまとめを記述している。	
18	(14)	○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	職員全員が臨機応変に柔軟な支援や対応などができるようにしている。	利用者や家族の要望には、可能な限り応えるようにしている。特に利用者の衣類の購入は、家族より職員の方がサイズの把握ができており、家族の了解の下に職員が購入している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	一人ひとりが安全で豊かな暮らしが楽しめるよう地域資源を活用している。		
20	(15)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	家族の付添いで受診をしていただき利用者の健康管理に協力していただいている。時には職員や訪問看護師も医師と相談することがある。	1名の利用者を除き、他は村の国保診療所をかかりつけ医として診療を受けている。原則訪問診療はないが、コロナのクラスター発生時には往診をもらった。村には、ドクターヘリのヘリポートがある。	
21	(16)	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院から退院まで医療関係者と密に連絡を取り情報交換やカンファレンスを行なっている。	現在1名の利用者が入院しているが、病院はコロナ対応で職員の面会が許されていない。現在の様子の把握や退院に向けての話し合いは、管理者と病院のケースワーカーが電話で行っている。	
22	(17)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居の段階からホームの方針を伝え、重度化した場合や終末期に対しての利用者と家族の意向を状態変化時などに聞き直しながら方向性を決めている。	利用開始時に、重度化・終末期のホームの指針を説明し、利用者、家族の同意を得ている。家族の要望があり、条件が揃えばホームでの看取りを行っている。コロナクラスターで1名の利用者が重症化したが、3週間で退院できた。	
23		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	研修やミーティングで実践力の強化に努めている。		
24	(18)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、消防訓練を行っている。日頃から福祉施設などの被災の報道を参考にして防災意識を高めている。	山あいにあるホームで、ハザードマップ上は土砂災害警戒地区である。平成23年の大雨の際、避難指示に従って避難所に向かう途中、あわや二次災害の危険に遭遇した。以降、災害時にはホームで待機することを決めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
25	(19)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者も職員も大半が小さな同村で暮らしているのでプライバシー保護や慣れすぎの関係には注意している。	地域の習慣として、家は屋号を使い、氏名は下の名前にさん付けすることが通例となっている。ホームにおいても、利用者の呼称は、すべて下の名前に「さん」を付けて呼んでいる。	
26		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	積極的に自分の思いや意見を言葉にする方が少ないので、日常生活で選択したり自己決定する場を作っている。		
27		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ホームでの大まかな一日の流れはあるが個別のペースを尊重し自分らしく暮らせるように対応している。		
28	(20)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	個別にご飯やおかずの量や硬さなどを変えている。3食とも手作り中心で旬の食材を大切に、郷土料理、行事料理も取り入れている。	3食手作りの食事を提供しており、利用者からも「美味しい」と好評である。食材は、職員が通勤途中に廉価なものを買求めている。季節に合わせて、ほうば寿司や芋餅、おはぎ、お節料理等をつくり、利用者も調理に参加する。	
29		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量や水分摂取量を毎食後記録し体調の変化や食事の様子を職員間で把握している。必要時、訪問看護師や医師と相談している。		
30	(21)	○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、個々に合わせて口腔ケアを行っている。	毎食後、ほとんどの利用者が自ら歯磨きを行い、職員が義歯洗浄などを手伝っている。必要に応じ、訪問歯科を呼んで治療を受けることも可能である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	個別の排泄パターンや習慣を把握し排泄記録を参考に対応している。使用毎に排泄状態の確認と清掃と消毒を行なっている。		
32		○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々に応じた入浴の支援をしている	隔日の午後に1名ずつ入浴していただいている。入浴を拒まれた場合、清拭や足湯、着替えのみといった代替策をとっている。		
33		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの過ごしたい場所が快適で安心できるようにし家具の配置や温度などに気をつけている。		
34	(22)	○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個別の介護記録ファイルに最新の薬の説明書をとじており職員全員が分かるようにしている。薬の変更時も申し送りの徹底を行なっている。	遅番職員が、翌日1日分の薬を薬ケースにセットしている。薬は1包化され、名前と服薬日時が記載されていることから、近年誤薬事故は起きていない。	
35	(23)	○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの生活歴や特技、趣味等を把握し日常に取り入れている。	入居するまで農業をしていた人が多く、継続した趣味や習い事をしていない利用者はいない。毎晩、夕食時にビールで晩酌を楽しむ利用者が2名いる。食事の下ごしらえや雑巾縫いを手伝ってもらうこともある。	
36	(24)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	外出は現在も積極的ではないが可能な範囲で行っている。	コロナ中は、村の文化展に利用者の作品を出品はするものの、感染予防の観点から見学は自粛していた。今年度は、役半数の利用者が文化展に出かけて作品を鑑賞できた。陽気の良いときには、庭の大テーブルで食事を楽しむ。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	日用品や美容院代程度の預かり金があるので利用者の希望に応じ支援している。		
38		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	制限なく行っており、できないことは職員が補っている。遠慮される場合も後押ししている。		
39	(25)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	民家改修のホームで家庭的な雰囲気がある。個々に合わせた居心地の良い空間づくりに努めている。	民家改造であり、玄関ホールやリビング、食堂は広々としている。玄関の土間には、職員が自宅から持ってきた旬の野菜や果物、地域からの頂き物等が置かれている。ホーム内に、誰もがホッとす穏やかな空気が流れている。	
40		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	複数でも一人でも居心地よく過ごしていただけるよう居間や食堂、縁側等にイスを置いている。		
41		○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居前や入居後に利用者や家族と「持ち物チェック表」を用いて相談しながら居室を居心地よくしている。		
42		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	個々の能力や状態に合わせて安全に自立した生活が送れるような環境づくりをしている。		